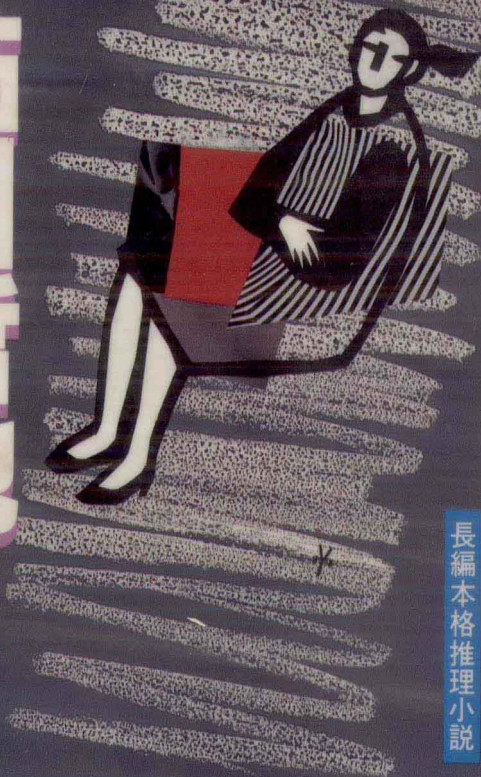


鮎川哲也



かげ
駑ある。墓極標

長編本格推理小説



RIPPÙ NOVEL

鮎川哲也



かげ
駑弱ある墓標

長編本格推理小説



RIPPÙ NOVEL

「誌記者映子を追った雑誌記者映子も謎の
殺されていゝ」を残して殺されていた。
巨匠の本格黒い野望。巨匠の本格巨編！

RIPPŪ NOVELS

あゆかわ・てつや 一九一九年、東京生まれ？「黒い
白鳥」「憎悪の化石」により第一三回日本探偵作家
クラブ賞。文字通り本格派の巨匠。

幻の探偵作家を求め、名作の再評価など、日本推理
界の青春時代を熱く語るかたわら、このところ鮎川
哲也は懐かしい小学唱歌「故郷」「浜辺の歌」など
のルーツをたずねる旅をつづけている。ミステリー
と音楽、少年の日の夢を追う姿はいつも若々しい。



撮影・山前 譲

『立風ノベルス』創刊にあたって

現代はミステリーに満ちています。

書下ろし長編推理小説をメインに、同時代に生きる人たちの興味と関心事にダイレクトに迫り、真にエンターテインメントに徹したミステリーを……。『立風ノベルス』のテーマです。シンボルマークの鳥は、ミストリーと呼んでください。

このシリーズを末長くご愛読いただき、またご意見やご希望など編集部までお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

一九八八年九月

立風ノベルス編集部



RIPPU NOVELS

長編本格推理小説 ^{かげ} 鷲ある墓標

著者 ^{あゆかわ} 鮎川 ^{てつや} 哲也

発行者 下野 博

発行所 株式会社立風書房

〒141 東京都品川区東五反田3-6-18

☎東京(447)1191(代)

振替 東京5-74493

印刷所 信毎書籍印刷(株)

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© TETSUYA AYUKAWA 1988 Printed in Japan

ISBN4-651-42005-2 C0295

長編本格推理小説

かげ
翳ある墓標

鮎川哲也



RIPPÙ NOVELS

カバー・本文イラストレーション

ブックデザイン

安彦勝博

吉原澄悦

目次

第一章	ひふみという女	9
第二章	失踪	30
第三章	鐘の音に胸ふたぎ	48
第四章	謎の文字	81
第五章	黒く毛深いもの	104
第六章	動機の発見	134
第七章	犯人ではあり得ない	158
第八章	カードの論理	187
第九章	遠い声	218
著者あとがき		241
プロフィール——山前 譲		245

第一章 ひふみという女

1

キャバレを出て有楽町の駅のほうへ歩きながら、二人の女は肩をくっつけるようにして、どこの中華料理がうまいとか、どこの店の婦人靴が安いとか、男性にとっては少しも面白くない話題に熱中していた。杉田^{すぎた}は、仲間はずれにされたことをむしろ幸いにして、せまい歩道の上を、おなじ方向に流れていく他の女たちの上に、デパートの高級家具売り場をひやかすときのような視線を投げていた。気に入った女がいることはいるが、自分のサラリーではとうてい手が出ないといった、羨望^{せんぼう}とあきらめの目である。

この時刻になると、銀座から新橋や有楽町の駅へ通じる道は、キャバレやバーの女たちでいっぱいにあふれるのが毎夜のことだった。洋服を着たの、和服を着たの、やせた女、肉感的な女、連れ立ってお喋り^{しゃべ}に夢中なの、独りぼっちで足早なの。彼女らに共通しているのは、ボックスに坐って客の相手をしているときには例外なく美人に見えたのが、ドレスを脱いで自前の通勤服に着かえてしまうと、例外なく疲れきった不健康な様子に見えることだった。赤や緑のネオンの下にさしかかると、その毒々しい光を浴びた鼻や頬^ほと、暗い隈^{くま}になった目や頤^{きん}が、彼女らの顔をいつそう疲れはてたように見せた。

トップ屋というおれの商売もしんどいけれど、ホステス稼業も楽じゃないと見えるな……。杉田はそのようなことを思い、すぐに一転して、これらの女の何パーセントがパトロン持ちなのだろうかと考えていた。

数寄屋橋^{すきやばし}は消滅して、橋があつた一帯は西銀座という散文的な名にかわっている。その西銀座を渡る

と、女の列は劇場の手前から右折し、駅への近道をとるのである。寒空に高く掲げられた絵看板の裸の踊り子は、昼間見たときとは違って、ピンク色に鳥肌だっているようだった。

「杉田さん、ちょっと待っててよ」

映子の声に、杉田は思わず足をとめた。その拍子に、後ろを歩いていた女が彼の背中にどんと突きあたって、舌打ちをしてすり抜けていった。

「どうしたんだい」

「あれよ」

白い歯を見せて彼女が言った。細い路地を入ったところに、石焼き芋の屋台が出ている。ロウソクのほの明かりが、ハンチングをかぶった芋屋のおやじの顔を浮かべていた。

「買うのかい？」

「だって、おなかがすいているんですもの」

手袋をはめた小さな手で、映子は胃のあたりを押さえて答えた。

この夜、杉田と映子は記事を取る目的で、ある男

とインタビューをした。相手を多弁にするために、彼が好きだというキャバレーに招待して、その華やいた雰囲気の中かで対談をやり、かなりの収穫を得たのである。

「まさかインタビューの最中に食べるわけにはいかないでしょ。あたし空腹で目が廻りそうだったのよ」

「ここで待っててやる。早く行ってこいよ」

杉田が言った。両手をポケットに突っ込み、ソフトをあみだにかぶって、どこかくずれた匂いのするポーズだった。

映子と、今夜のホステスだったひふみとは、小走りに路地のなかへ駆け込んだ。ひふみの白のハイヒールが夜目にもはつきりと躍動して見えた。

杉田を待たせておいて、女たちは本性である図々しさを発揮した。夜風のなかに彼を立たせたまま、好物の焼き芋を五分近くかかってしこたま平らげた。出てきたとき、映子もひふみもハンカチで唇をふいていた。

「わるかったわね、待たせちゃって」

「そうやって澄ました顔をするよ、どう見たっていま芋を喰ったとは思えないよ。女ってこわいね」

「何言ってるのよ、いま知ったわけじゃないのにさ。ひふみさん、杉田さんたらまだ独身なの。女がこわくて結婚に踏みきれないんですって」

「あら」

「憶病なのよ、つまるところ、そのうち臺が立って、だれからも相手にされなくなるから見ててごらんなさいな」

ひとしきり女たちは杉田の棚卸しをやり、杉田は長い顔に苦笑を浮かべて、あらぬかたを眺めていた。高森映子の毒舌には、彼ばかりでなく、編集部のだれもが慣れていたのだ。意地のわるい、しんねりむつつりした悪口とちがった映子の言葉には、トゲがなかったからである。

駅の前までやってくると、ひふみは急に足をとめ、ここで別れると言いだした。三人とも住居は山手線の沿線にある。一緒に帰るつもりでいた映子は、ハ

ンドバックをかかえなおして、意外そうに相手を見た。

「どうしたのよ、急に」

「思い出したことがあるの、ここで失礼するわ」

ひふみはミンクまがいの人造毛皮のオーパーに身をくるんでいる。その上体をよじって、ちょっとしなをつくるようにして杉田を見た。卵に目鼻をつけたような日本的な顔立だが、均斉のとれたからだをしているせいか洋服がよく似合う。キャブレでドレスを着ていたときも、いまこうして立っているオーパーを着た姿からも、杉田はおなじ印象を受けた。

「そう、それじゃまたね。久しぶりでずいぶん楽しい思いをしたわ」

映子は察したように答え、それにつづけて二人は、女同士のあのいたわりに満ちた、社交用の挨拶をかわした。

「杉田さんも」

と、ひふみは水商売の女らしく、如才なく名を覚えていて呼んだ。

「またいらしてくださいね」

「ええ、ぜひともね。今夜は愉快でした」

「あたしがいなかったら、もっとね」

快活に映子がまぜ返した。

ひふみと別れて、二人はふたたび女の流れのなかに身を投じた。改札口をぬけ、階段をのぼってホームに上ったとき、映子ははじめて口を開いた。

「いい人でしょ」

「ああ、感じがいいね。ちょっと寂しい翳^{かげ}を見せるときがあるけど」

杉田は思ったまま答えた。女がいい人でしょうと言つて返答をもとめる場合、その多くが反語であつた。自分の言葉に反対してくれることを、言外に求めているのである。うっかりした返事をして、あとで手痛い目にあつた覚えが杉田には何回かあつた。だが映子の場合にはそうした配慮は無用なのだ。彼女が同性をはめるときには、しんからそう思い、そして相手の同感を期待しているのである。

「高校時代は優等生だったのよ。同級生はみな、ひ

ふみさんがいちばん幸福な人生をおくるものと思つていたわ。美人だし性格もいい……」

「美人ね」

「でも、運命ってわからない。旦那さんは結核で亡くなるし、ひとり残つた子供さんは日本脳炎で死んでしまふし……。いまでは、あたしのほうがずっと幸福だわ」

「ま、きみも早いと旦那をもらうんだな。そうすりゃもつと幸福になるさ」

「言われなくつたつてもらうわよ」

「だからさ、早くしろと忠告してやっているんだよ。結婚が遅くなればなるほど、乳癌^{にゅうがん}になる率が高いんだってさ」

「あら、どうして?」

「そいつは知らない。知っていたつて、こんな人なかでは言えないさ。だが、その点男は気が楽だよ。いくらオールドボーイになろうとも、乳癌になる心配だけはないからね」

「あら、あんな呑気^{のんき}なこと言つてる。男性だってな

るのよ。ことにお酒呑みがあぶないんだから」

おどかすように、映子は横目で彼を見た。

杉田はオーバーのポケットに両手を突っ込んだままだった。そこには今夜の対談の要点筆記をしたメモが入っている。落したりすられたりしては一大事だ。冗談を言いながらも、左手の指はメモの束を握りしめていた。

「電車遅いわね。どうしたのかしら」

会話に飽いたように、小さくあくびを噛み殺した映子は、マフラーのあたりに手をやってホームの時計をかえりみた。針は零時二十分をさそうとしていた。改札口を通してからすでに十分近くたっていた。

2

杉田兼助が勤めているトップ屋集団のメトロ取材グループは、神田駅のすぐ近所にある。都電通りに面して、このあたりの一等地ではあったが、二つのビルの間にはさまれて冬は陽あたりがわるく、夏は

風通しがよくなかった。今度の夏はルームクーラーを、そしてつぎの冬にはヒーターを備えつけようというのが、編集長以下の一致した希望である。それはともかく、日中でもちよっと雲のある日には、天井の蛍光灯をつけなくてはならなかった。

その日、杉田と映子は机に向き合って、昨日のメモをもとに、三十枚の会見記を書き上げていた。映子は普通の週刊誌から注文が来ているのだが、杉田のほうはそれをくだけた興味中心の読物にしたうえで、さらに通俗読者向けの週刊誌に売り込まなくてはならなかった。

「くたびれたな。アミダでもやらないか」

「三人きりしかいないじゃないの。だめだわよ」

編集室のなかを見廻してから、映子はつまらなそうに言った。同僚たちはみな仕事に出かけており、残っているのは編集長の江崎だけである。その江崎は若白髪わかしろかみのまじった頭をこちらに向けて、さきほどから外国漫画の翻訳に打ち込んでいた。四コマのサラリーマン物で、短い英語のセリフを同様に短い日

本語に置きかえる。原語のニュアンスにびったりする日本語が見つかって満足のゆく訳がつくと、そのセリフをそつと口のなかでつぶやいてから、頬骨の飛び出た黄色い顔に皺しわをよせて、渋い、笑いともつかぬ微笑を浮かべるのだった。まだ老成するには程遠い四十代だというのに、江崎はいつもオブラートなしでセンブリをなめたような苦にがい顔をしていて、笑いを見せるのは快心の漫画の訳ができたときぐらいであった。体質的に酒のためな、甘いものの好きの編集長は、センブリが常備薬でもあったのである。

「ねえ編集長、杉田さんがアミダをやろうと言うんですけど」

「アミダ？ 何を買うんだね」

「アツブルバイか苺いちごのショートケーキ……」

「ぜいたくだな、少し」

「それなら大福でもいいですわ」

と、映子はじわじわと所期の目的に誘導していった。

「さつき、アルバイトの稿料が入ったんじゃないござい

ません？」

「見ていたのか、きみ」

「大福だと百円買えば充分ですわ」

「しょうがない、買ってきな。ついでにガスに薬や罐かんをのせてってくれよ」

財布から百円札を三枚取り出して、それを机の上に投げた。

「大福ばかりじゃ曲まががない。ほかに手頃なやつをまぜてな」

「行ってきますわ」

「お映ちゃん、おれが湯をわかしくよ」

杉田も立ち上って薬罐やかんのほうに手を伸ばしかけたが、指先が黒く汚れていることに気づいて、あわて引っこめた。

「不潔な手！」

「洗ってくるよ。大福よりも芋のほうが喰くいたいのじゃねえのかい」

憎まれ口をたたく杉田の鼻の先で、扉が音をたてて閉じられた。

杉田は洗面所で手を洗い、薬罐に水を入れて、ガスコロにのせた。疵だらけの、あっちこっちが凹んだ銅の薬罐は、この部屋の前住人が置いていたもので、噂に聞くとこゝろでは、前の住人はさらにその先代の住人からひきついだということだった。編集部のなかでは、化けそうな薬罐だと言われている。

杉田が机に戻ると、江崎がゲルベゾルの平たい箱をほうってよこした。

「珍しいですな」

「学生のころはよく吸ったよ」

「学生の身分ですか」

「安かったのだ。時代がよかった。いや、そうも言えないな。そのころいやに感じのわるい文部大臣があらわれてね。パパだとかママだとか言っではいけないの、大学生が日中からマージャンをやっではいけないのと、うるさく干渉したもんだ」

「戦前にも、マージャン屋へ入りびたる学生がいたのですか」

楕円形の切り口をとんとんと机にたたきつけながら、杉田は不思議そうに反問した。

「いたさ。なんのために大学に入ったのかわからないというやつがいくらもいた。いまでも昔もおなじさはっぱをかけられた刑事が、学校の近くの食堂でライスカレーを喰っていた学生までブタ箱に投げ込んでね、学生が抗議をしたりした。彼らはこれを学生狩りと称していたんだがね」

江崎は机に両肘をついて、手の甲に顎をのせ、そのころの学園生活を語っていった。白髪の頭が、ものを言うたびにひよこひよここと動いた。

軽い味のドイツタバコをくゆらしながら、杉田は、半白髪の編集長の顔のなかに、若き学生時代の面影を想像することに困難を感じていた。

ドアがあいて、餅菓子の包みを持った映子が帰ってきた。片手に二、三部の夕刊を持っている。

「やあ、すまんね」

「編集長のお好きな豆大福をまぜてきましたわ。はい、これ夕刊。あたしのサービス」

「じゃ、おれがお茶のサービスをするか」

杉田ものっそり立って、三人の湯呑みを盆にのせると、水道の蛇口の下に持ってゆき、栓をひねった。

「杉田さん、お湯がわいたわ、ガスの栓をとめて」

「おいきた」

「だめよ、水道のコックをひねっておかなくちゃ。

メーターが上るじゃないの」

「わかったよ、うるさいね。梅檀せんだんは双葉よりかんばしとはよく言ったものさ。いまにご亭主が泣くね」

「あら、聞き捨てにならないわ。家庭の主婦というものは、よほどお金持ちの奥さまならば別だけど、みなこまごましたことに気をつけなくちゃ務まらないのよ。安月給取りの亭主に泣かされるのは、こっちだわよ。あらあら、お茶の葉をそんなに沢山入れる人がありますか」

とうとう堪たまりかねたように、映子も立ち上った。

「高森君」

新聞をひろげたまま、編集長が映子に声をかけた。

「はい」

「昨夜行ったキャバレは『女だけの都』という名じやなかったかい？」

「そうですわ。どうかしたんですか」

映子は編集長に向きなおって言った。

杉田も茶をいれる手を休めて、編集長の白い頭を見た。

「その女給が熱海あたまで自殺したね。崖から海に飛び込んだのだ」

「まあ」

映子は思わず杉田を振り返っていた。昨夜接したあの薄っぺらではあるけれども、多分に華やかなムードにみちた職場と、そこに働く女とが、投身という自滅行為に容易に結びつかないのである。目に入ったかぎり、どのホステスも媚笑をたたえて楽しそうに呑み、踊り、男の客にしなだれかかっていた。それらの女のなかで、胸中ひそかに自殺を決意していながら、外観は明るい微笑をたたえてステップを踏んでいたのは、いったいだったのだろうか。